

平成30年産(29年播)麦生育情報 特別号 (H30.2.7)

(情報作成)滋賀県農業技術振興センター

(次回は2月下旬の予定)

滋賀県近江八幡市安土町大中 516 (TEL:0748-46-4391)

1 気象経過と生育状況

①気象の経過 (彦根気象台、平成20～29年の平均値との比較)

期間	要素	平均気温	日照時間	降水量
	12月	上旬	低い	平年並
中旬		かなり低い	平年並	やや少ない
下旬		やや低い	平年並	平年並
1月	上旬	平年並	平年並	やや多い
	中旬	かなり高い	かなり多い	少ない
	下旬	かなり低い	平年並	平年並

注) 平均気温 <±0.5℃:平年並、±0.5～1.0℃:やや高い(低い)、±1.0～2.0℃:高い(低い)、±2.0℃<:かなり高い(低い)
日照時間 <±5hr:平年並、±5～10hr:やや多い(少ない)、±10～15hr:多い(少ない)、±15hr<:かなり多い(少ない)
降水量 <±10mm:平年並、±10～20mm:やや多い(少ない)、±20～30mm:多い(少ない)、±30mm<:かなり多い(少ない)

②県内の生育状況

- 全般に播種が遅れたことに加え、12月まで平年より気温が低かった影響により、生育は平年よりかなり遅れている。
- 全般に生育量は小さく、特に、11月下旬播種のは場では、分けつが進まず、茎数は平年よりかなり少ない。

2 今後の管理

上記のとおり、現在の生育状況は平年より劣っているが、今後の管理次第で回復させることは可能なので、以下の対策を徹底する。

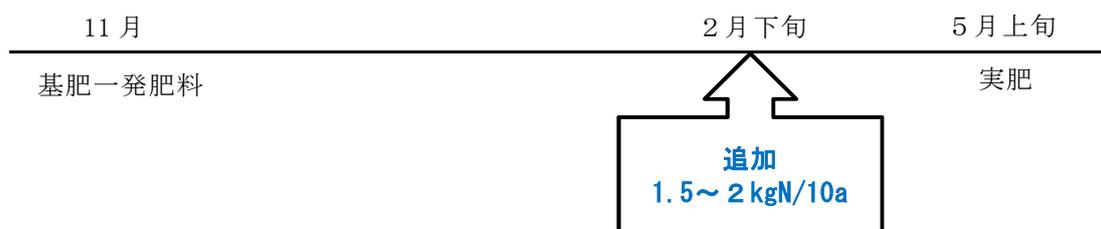
(1) 排水対策

- 排水不良は、根の伸長が不十分となって登熟期にまで影響が及び、収量および品質低下を引き起こすので、溝に水がたまっただまの状態にならないよう、溝さらえを行うなど徹底した排水対策を講じる。

(2) 追肥

①基肥—発体系の場合

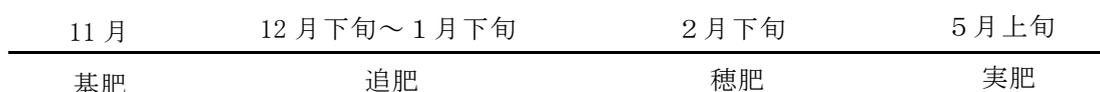
○麦の生育量が小さいことから、窒素吸収量は少ないと考えられる。このことから、基肥—発肥料に配合された速効性肥料や溶出した緩効性肥料の窒素利用率は平年に比べて低く、吸収されなかった窒素が流亡している可能性が高い。そのため、茎立前の2月下旬に窒素成分で1.5～2 kg/10a程度を追加施用する。



②速効性肥料の分施（基肥—追肥—穂肥—実肥）体系の場合

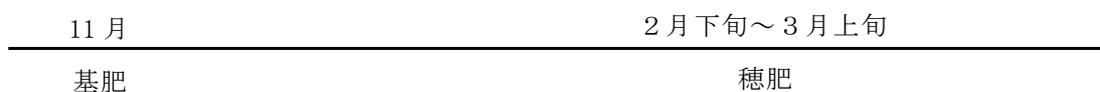
○穂肥の施用量は施肥基準を基本とする（「農林61号」では窒素成分で3 kg/10a、「ふくさやか」、六条大麦では窒素成分で4 kg/10a）。

○穂肥は、茎数が少ないほ場では茎数を確保するため、早めの2月下旬に施用する。



③緩効性肥料の分施（基肥—穂肥）体系の場合

○基肥（緩効性肥料）の肥効が持続すると考えられることから、施肥基準どおり穂肥を施用する。



※積雪がある場合は、融雪後速やかに施用する。

【参考サイト】

農業技術振興センター	http://www.pref.shiga.lg.jp/g/nogyo/
病虫害防除所	http://www.pref.shiga.lg.jp/g/byogaichu/
彦根地方气象台	http://www.jma-net.go.jp/hikone/
異常天候早期警戒情報	http://www.jma.go.jp/jp/soukei/

平成30年産(平成29年播) 麦作期間半旬別気象図(彦根気象台観測)

